
紅い海は夢色に染まる

stera

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い海は夢色に染まる

【Zコード】

N1228Y

【作者名】

steria

【あらすじ】

オレは、ただキミの傍に居たかったんだ。キミがたどえ…。
怪我をした少年の前に現れる不思議な女性。2人の行く末は?

エブリスタにも掲載している作品です。

白い世界に、鮮やかな紅い服をきたキミの姿は、とても印象的だつたんだ…。

身体が、重い…。

「……オ……。」

「何か、聞こえる？」

「……ナ……オ……。」

オレ、呼ばれてるのか？

今は、昼だろうか？夜だろうか？こんなにも世界が暗いのは、何故だ？

： そつか、瞳[×]を閉じているせいだ…。

「……」^ヒい…ちや…。

この声は、妹の紗江^{サエ}だな。ああ、眼を開けないと。瞼^{まぶた}が、重い…。

すつと一筋の光が射すよつて、オレは、暗闇から目を覚ました。

「ナオ！」

「お兄ちゃん！」

「おい、医者^{セイセイ}を呼べ！ナオ、大丈夫か？」

「……なに？オレ、ここで…なにして？」

「お兄ちゃん、憶えてないの？」

オレには、妹の言つている意味が解らなかつた。家族が揃つてゐる訳も。ただ、見慣れない白い部屋に入れられているオレは、身体中がバラバラになるような痛みに襲われていた。

『憶えてないの?』

… ああ、何があつたって言つんだ?憶えていない。いや、思い出せない。落ち着け、オレ。だいたい、今日は何日なんだろ?隣町の高校でバンド組んでる知り合いが、ギターやってた奴がメンバーカラ抜けたから一緒にやらないかつて誘われてるんだ。こんな所で寝てる場合じや… ?

違う…何か、違つ気がする。

「木城君、わかるかい?」

白衣を着た、たぶん医者が尋ねてきた。オレは、身体を起こさうとしたが…激痛で起き上がる」とも無理だつた。

「まだ、そのままにしてて。絶対安静だからね。」

「オレ、なんでこんな事に?」

「憶えてないかい?君、バスに乗つていて、事故にあつたんだよ。お兄ちゃんの乗つてたバス、居眠り運転のトラックに突つ込まれて、海に落ちちゃつたんだよ…」

「そうなのか?」

「憶えてないようだね。無理に思い出す必要は無いから、今はゆつくり休むんだよ。」

母さんが言つには、オレは頭を切つて5針縫つたらしい。アバラも、2本ほどヒビが入つてていると言われた。これぐらいの怪我ですんだのは、まだ良かつたほうだと言われた。

天井を見つめながら、事故の事を思い出さうとしたが、全くのムダに終わった。どうしても、思い出せない。一つだけ思い出せた事と

言えば、オレはバンドの顔合わせに行こうとしていた、ということだけだ。

「メンバー入りの話し、無くなつたな…。」

オレは目を閉じ、再び眠つた。

3日後、よつやくベットから降りることを許されたオレは、母親に車椅子を押してもらひ、初めて病室を出た。

「向こうにあるデイルームに行つてみる？ 見晴らしがいいのよ。」

「うん…。」

気のない返事を返す。久し振りに長時間（といつても、まだ10分くらいだが）起き上がつているだけだが、辛い。

デイルームは、明るい陽射しが眩しく射し込む見晴らしのいい場所だった。ここが5階だということもあり、景色もいい。窓際に車椅子を止める。

「しばらぐ、ここに居る？」

「うん…。」

「じゃあ、母さんちよつと洗濯機に洗濯物ほおりこんでくるわ。」
そう言つて、病室へと駆け出してくれた母。ここに入院してから、ずっと付き添つてくれている。仕事だつてあるはずなのに… 最近は、母親と余り話すことも無かつたな。

ふと、デイルームの奥にある家族控え室に目をやつた。畳の敷かれたその部屋は、母も身体を休めるとき使つていて話していたことがあつたが、そこに、1人の女性がいた。

胸元にリボンのついた真つ赤な服をきた彼女。ショートワンピースから伸びた脚はスラリと長く、茶色くウェーブのかかつた長い髪をかきあげる仕草が、とても様になつていた。

「何？」

「えつ？！」

こちらの視線に気付いたのか、彼女が声をかけてきた。カラーコンタクトをいれているのだろう、グレーの瞳が、まっすぐにこちらを見た。

「えつと、どこかで逢つたよね？」

： 何言つてんだ、オレ？！

猛烈に後悔した時には、すでに時遅く、彼女は大爆笑しながら呆れた表情^{カオ}でこちらを見た。

「そつ、そんな怪我^{ケガ}してるクセに、こんな場所でナンパ？」

「ちつ違う！ホントに、逢つたことないかな？！」

「クスクス、さあ？」

彼女は、まだ笑っている。

「えーっと…君は、お見舞い？」

「うん、そんなとこ。」

「元気そうだもんな。」

「あなたは、派手に怪我^{ケガ}してるみたいね。」

「交通事故でさ、憶えてないけど。」

「そつか。私、吉野^{ヨシノ}桜^{サクラ}あなたは？」

「オレ、木城^{キジョウ}尚義^{ナオヨシ}。」

「ふうん。また会うかもしれないし、よろしく。」

「こつちこち、よろしく。」

これが、彼女との出逢いだつたんだ…。

「ナオ、大丈夫だつた？。」

「え？…母さんか。」

「残念そうな言い方だわね。なんか、イイコトでもあつた？」

「ないよ。」

言いながら、家族控え室の方をチラリと見た。

「あれ？」

「どうしたの？」

彼女の、サクラの姿が無い。先程まで、そこにいたのに…。

「…なんでもない。なんか、疲れてきた。部屋に戻りたい。」

「そうね、無理しない方がいいわ。」

母親が、車椅子を押す。

『それに対しても、かわいい子だったよな。』

苦痛ばかりで、なんの楽しみもない病院生活だった。無機質で単調な白い世界に閉じ込められて、思うように動かない身体を引きずつて…。そんな中、鮮やかな紅い服に身を包んだ彼女が、とても新鮮で… どう言えばいいのか言葉が見つからない。とにかく、オレの中で“彼女”的存在は、忘れようのない強烈なイメージとして焼きついた。人に対してもこんな感覚を持ったのは、初めてだった。

『また、逢いたいな。』

重たく、少し動くだけでも激痛に苛まれる身体をベッドに横たえると、オレは再び眠りについた。明日になつて、この激痛も少しは和らいでくれればいいのに。

キミがいるから

怪我の痛み、

やりたい事が出来ない痛み、
家族に迷惑をかける痛み、

： キミが、痛みを和らげてくれたんだ。

病院に来て、もう2週間になる。オレの病室には、同じクラスの生徒から、お見舞いにと千羽鶴と寄せ書きが届けられた。別に、クラスの人気者だった覚えはないし、話したこともないような相手からも寄せ書きが書かれているのを見て、何か不思議な気分だ。励ましてもらえるのは、嬉しい。ただ、毎日続く“痛み”がオレを卑屈にしていた。

可哀想だと哀れに思われているに違いない。家族にだつて迷惑をかけてる。いつそ、オレなんて死んでた方が良かつたんじゃないか？

そんな想いを抱えて… 」の日、とうとう鬱積ウッセキした想いを抑えきれずに、オレはキレた。

「ほら、もう少し頑張らないと。」

リハビリの受け付けで、いつもより早く帰らうとしたオレに、座っている事務のおばさんが言った。

「…今日は、いつもより身体が痛くて、疲れたから。」

「何、言つてるの？ 若いんだし、もうと頑張れるでしょ？」

「…。」

「働いてる人と違つて寝てるだけなんだから、頑張つてリハビリしないと…。」

「…んだよ、それ。」

頭の中が、一瞬白くなつた。心が怒りで震える。オレは、勢いのまま怒鳴つた。

「…頑張れつて、毎日頑張つてんだろ？！オレのどこが頑張つてないんだよ！好きで毎日寝てるとでもいたいのか？！自由に動けた

ら…痛みが無かつたら、オレが寝てる訳ないだろ…これ以上、どう頑張れってんだ…！」

怒鳴られ、予想外の事にたじろぐおばさんを前に、オレは睨み付けるとその場を後にした。本当は、駆け出したい。でも、今の自分には、はや歩きが精一杯だった。

「誰も、好きで入院した訳じゃない！オレが、何したってんだ…！」携帯電話を使えるようにと作られた狭い部屋の中で、オレは叫んでいた。

オレの気持ちなんて、誰も解ってない。いや、解らないだろ…

キイ。

「クスクス、外まできこえてるよ。」

突然開けられたドアから顔を出したのは、この前の彼女、“桜”だつた。

「あ。」

「荒れてるねえ。どうしたの？」

「ちょっと、色々あつてさ。」

「へえ？良かつたら、話し聞いたげよっか。隣、座つていいですか？」クスクス。

今日も、鮮やかな赤色の服を着た彼女は、余っている椅子のスペースを指差して言った。

「別にいいけど。」

そう言って、オレは席を左に詰める。隣に、チヨコンと彼女が座つた。

「どうしたの？」

グレーの瞳が、オレを覗き込む。

「…リハビリでさ、なんかキレちゃって。…頑張れ頑張れ言われて、目一杯なんだよ。」

「ふうん。ナオヨシちゃんは、自分を否定されて『立腹なんだ。』『なつ？！ナオ、だ。昔の母さんじゃあるまいし、妙な呼び方するなよ！』

「クスクス、ごめんねえ。で、ナオは皆に理解されたくて怒つてんの？」

「……あんた、性格悪い？」

「うん、よくそう言われる。それと、私は“あんた”じゃなくて“さ・く・ら”だから。」

初めて逢ったとき、大人しそうで優しそうで…勝手に女の子らしいイメージを膨らませていたオレは、彼女と直接話して面食らつていた。全然、見た目と違つてゐる。ある意味詐欺だ！

「クスクス…ね、他人に何言われたつていいじゃない。怪我人なんだから、少しくらい頑張らなくてもいいんじやない？」
「え？」

「一生懸命やつてるの、私は知つてるよ。ナオは気付いてなかつたみたいだけど、私は見てたからね。」

「サクラ、よく病院に来てたんだ。」

「…うん。」

「？」

一瞬、妙な間があつたような？首をかしげたオレをサクラは、微笑みながら見つめていた。

それから、オレは身体が痛いのも忘れたようにサクラと話し込んだ。家族の事、高校の事…驚いたのは、趣味の話をした時だつた。ターカツコイイとか思つちやつて。気が付いたら、すっかりハマつてた。

「…でさ、嫌々妹にライブハウスへ連れてかれたんだけど、ギターをコイイとか思つちやつて。気が付いたら、すっかりハマつてた。」

「ナオ、手大きいからバレーコード面倒なら握り込んで楽に弾けて

便利じゃない?」

「! サクラ、ギター弾くの?」

「フフ、今度はナオが私に聞くんだね。」

「え? 何が? ?」

「フフ、こいつの話だよ。うん、私もギター やつてるんだ。」

「へえ、意外だね。じゃあ、オレ達つて音楽仲間だ。」

「アハハ、そうなのかな。ね、私ナオとは、気が合つてそう。……ねえ、

今度から病室にも行つていい?」

「もちろんだよ、503号室だから。寝てる」とも多岐にけども。待つてるよ。」

部屋を出た二人。

「お兄ちゃん!」

不意に自分を呼ぶ声がした。

「もひ、こんなトコにこもつてたつて何処にいるかわからないじゃない。」

声のした方を見ると膨れつ面の妹の姿があつた。

「んだよ、ちょっと彼女と話してただけだろ?」

「ハア? ……彼女ってどこの?」

「どひつて、お前馬鹿か? 隣の… あれ?」

「隣の誰よ? 私が来た時から、誰もいなかつたんだからつーしつかりしてよ…。」

サクラが、いない。

今、隣に居たといつのこと…。彼女の姿は、どひにも無かつた。

「お兄ちゃん、ホントに大丈夫？」

「何が？」

「あたま。

—○—

沙工
がうこう

紗江がつるたい。せつかく樂になつていいた氣分も、すつかり元に戻つていた。

るのかも。「

「オレは別にどいつも悪くない」

卷之二

「何よつ、私心配してあげてるのに!!」

心酔してくねなげて
棘々が覚えは無い

卷之三

ツガツなど
あからさまに不機嫌な足音が遠ざかって行った

卷之三

ため息をついたオレは、そい、でベッドの手すりを握りしめた。
しばらくして、病室に看護師さんが夕食を運んできた。

木城さん、お食事ですよ。あら? 今田は、『家族の方居ないの?』

卷之三

一瞬相手の表情が曇つたのをオレは、脱逃がなかつた。

「そう。食事は、食べやすいようにオカズは串を刺してあるけど…

「されど、おまえが悪がるから言つて下さいれ」

入院してからずっと、今まで食事の時間だけは、誰かが付き添

つてくれていた。今日は、紗江が来てくれたのだろうが、さつきケンカになつて帰してしまつた。

「食事くらい、1人でするわ。」

そう言つて、オレは串刺しになつてゐる鶏肉を口へと運んだ。

窓から、柔らかな月明かりが射し込んでくる。今日は、看護師さんにも言つて窓のカーテンを少し開けたままにしてある。横になつたベットからでも、丸い月がよくみえた。

『時は、戻れない。』

ふと、誰かがそんな風に言つていたのを思い出した。2週間前のオレは、まさか事故にあつてこんな風になるなんて、思いもしなかつた。前までは、なんでもなかつた日常生活に、今はこんなにも不自由している。

『もし、あの日あのバスに乗つていなければ…。』

そう何度も思つても、時間が戻るわけもなく…。

「時は戻れない。どんなに辛くとも、キミは生きてるんだよ。」

「え？！」

オレは、驚いて後ろを見た。個室の病室に、自分以外は、誰もいない。扉は閉ざされたままだ。

「気のせい…。」

そう納得し再び窓の方に顔を向け… オレは、心臓が止まるほど

驚いた。

「今晚わ、ナオ。」

「…サ・サク…ラ…？！」

月明かりに照らされた窓の前、鮮やかに微笑^{ワニ}う彼女の姿があつた。

「クスクス、驚いてるう～。変な顔。」

「あ・当たり前っ…！あ・あんたは？…！」

「恥ずかしがりやの人見知りでーす。」

オレは、今どんな顔をしているんだろう？どんな表情^{カオ}で、彼女を見ればいいのか？月明かりに照らされた彼女は、とても綺麗で…それなのに生氣を感じない。冷たい、人形のようだ。

「サクラって、死んでるの？」

「… 分からない。そうかもしれないし、違うかもしれない…。」

「… 気付いたら、こうなつてたから。」

「…。」

「なんか、ナオにしか見えないみたい、私。やつぱり、死んじやつてるのかな？私って…。」

オレは、恐る恐る彼女の右手に手を伸ばし…。

「…掴める。」

「ホントだ…。」

オレは、サクラの顔を見た。今度は、彼女が驚いた顔をしていた。

「ナオは、私に触れてもすり抜けないんだ…。」

サクラは、嬉しそうに言った。

「ちゃんと、掴める。…幽靈なら、掴めないはずだよな？」

「なにそれ…フフ、私ナオ以外の人には、見えないし触れないんだよ？」

「じゃ、妖精とか天使とか、意外に悪魔かも。死神じゃないだろうな？」

「違うんじゃない？じゃあ、天使って事にしてよ。」

「悪魔じゃないのか？」

二人、顔を見合わせる。なにか可笑しく思えて、オレもサクラもクスクス笑い出した。

「サクラ…身体、探そう。」

「はあ？」

「きっと、身体に戻れなくなつてフラフラしてるだけだつて。手伝うからせ、何か思い出せば、どこかでちゃんと目覚めるんじゃないか？」

「うーん、私このままで楽しいからいいんだけどね。」

「そんな、いい加減な。」

「ただ、なんか凄く“大切なコト”…忘れちゃつてる気はするんだあ…。」

「サクラ…。」

そう言つた彼女の横顔は、とても悲しげで…思わず抱き締めたいくらいだつたけれど、彼女は蠟燭の火が消えるかのようになにスウツとその姿を消した。

「ナオ、あんた昨日紗江を追い返したつて？…なにやつてんのよ。あの子、お兄ちゃんの頭が壊れてるつて家で大騒ぎよ。」

「…知るかよ。」

「ちゃんと、ご飯食べれたの？」

「食べたつて。」

めんどくさい、朝からギヤアギヤアと…。母親の心配する声も、今はただの雑音でしかない。気になるのは、昨夜の出来事だけ…。

『夢、だつたのか？』

「… だいたい、皆心配してるので、解つてるので…」
終らない小言に、いい加減イライラしてきたオレは、ため息をつく
とウルサイ母親を睨む。

「朝からガタガタうるさ……モガッ。」

『いちいち、つつかかるな。『心配してくれてありがとう』って、
言えぱいいじやん。』

「（サクラ）？！」

「？ナオ、どうしたの。」

突然、口を両手で塞がれた。母親には、見えていないらしい。いつ
の間に現れたのか、背後にペッタリくっついた彼女がオレの口を塞
いでいる。

『ガキじゃないんだから、わざわざ人を怒らせるな。』

「モガモガ（サクラ、手離して）…！」

『ちゃんと、ありがとうって言いなさい。』

「ング？！（なんで）」

「ナオ？」

『事実でしょ。言つて約束するまで、離さないんだら。』

「ブハッ…ハアハア。（わかつたから、離せつ…）」

「ちょっと、具合悪いの？看護婦さんに来てもらひ？」

『平気だよ、そんなんじやない。…心配してくれて、ありがとう。』
最後の方は、口ごもるような言い方になってしまったが…。チラリ
と見た母親の顔が、自分が思つていた以上にほほりんでいるのを見
て、ハッとした。そういえば、入院してから…いいや、その前から
だ。もうずっと母親のそんな顔を見ていない気がする。

「ナオ、可愛くないんだ。」

「ウルサイ。それより、いい加減離れろ。」

む・胸が背中にあたつてゐるじゃ ないかっ！

狭いベットにくつろぐように座つたサクラは、ニヤニヤしながら、こちらの様子をうかがつてゐる。

「サクラ、ホントに他の人には、見えないんだね。」

朝食を食べながら、母親の耳にはいらないう小声でサクラに話しかける。

「昨日、言つたでしょ。」

「夢だと思つてた。」

「残念、現実でーす。」

「…その状態で、あつさり現実つて言つくなよな。」

「あー、こーゆーのをとり憑いたつて言つんじやない?」

「サクラが言つくなよな。」

ブツブツと独り言を呟く息子を怪訝そうに見つめる母。

「そうだ。ナオ、家にお友達がたくさん来てたわよ。」

「誰?」

「河上さんとか水野さんとか…女の子。他にもクラスメイトつて子

が、何人か来たね。」

「居たかなそんな奴らも、友達じゃないけど。」

「あんたね…友達とか、学校で上手くいってるの?」

「知らねえ。」

「うわ、嫌われてんだ。」

「違う!」

「…なんなの、突然大声出して。ビックリするでしょ。」

「…。（お前のせいだぞ、サクラっ！）」

彼女は、お腹を抱えて足をバタつかせ大笑いしている。まったく、

質が悪すぎる！^{タチ}

「ねえ、そんな表情^{カオ}してリハビリ行くつもり？」

「ただけど。」

「ヤダヤダ、イライラ君だよ。も少し笑顔つて出ないわけ？」

「あのさ、サクラ。ガミガミ母さん以上にウルサイぞ。」

「年上なんだから言つたつていいでしょ？」

「…サクラ、オレより年上なんだ？」

「アレ？… 今、思い出したよ。私、ナオより年上だよ。高校、

卒業したんだもん。卒業して… ？」

「思い出せないんだ。」

「うん。でも、ちょっとと思い出したよ。ナオのお陰だね、ありがとう。

「オレ、なんにもしてないよ。」

サクラの笑顔。サクラは誰にも見えないから、今この笑顔は自分にしか見えないんだ。そう思うと、人より得した気分で嬉しかった。まるで、自分が皆が知りたがっている秘密の答えを知っているみたいで… そうだ、答えた。彼女がどうしてこうなったのか、秘密の答えを見つけて元に戻してあげるんだ。

「サクラ、あのさ…って、また勝手に消えたのか。」

リハビリ室を前にして、再び彼女は姿を消した。

それから、サクラは頻繁にオレの前に姿を現した。オレが、落ち込んだりイラついて不機嫌な顔をする暇もないくらい… 今思えば、オレの為だったのかも知れない、口から出る言葉が文句ばかりだったオレ。“あの日”だって、前日にキレて病室へ戻つてきっていたから、

リハビリなんてやる気がなかつた。やめるつもりだったのに、サクラと話している内にそんなこと忘れて足を運んだ。

サクラが笑う。

彼女の明るさに、オレはいつも助けられていた。

サクラがいたから、オレも、笑う事が出来るようになつていたんだよ。

花火

暗闇を照らす光

このまま、ずっと二人で……。

オレが入院している間に夏休みが始まり、友人の何人かが訪ねてきた。

「大丈夫か？」

と聞かれる言葉に、

「まあ、大丈夫だよ。」

と返すことを何日か繰り返し、やり過ごす。

「ナオ。」

今日きたのは、オレをバンドのメンバーに誘つてくれた良一、沢サワ

崎良一だ。

「よ。」

「お前、生きてて良かつたな。」

「ん、まあな。」

「お前さ、切つたの顔じやなくて頭で良かつたよな。手とかは、動くんだろ？」

「動くけどさ。打ち付けたせいかな、まだ、あんまり力が入らなかつたりするんだ…。」

「そつか…。ギターの話しなんだけどさ…。」

「代わりのメンバー決まつたんだろ？頑張れよ。」
顔を見ればわかる。事故にあつてすぐ諦めていた。

「悪い。スマン。」

「謝んなよ、悪いのオレだし。せつかく誘つてくれたのに、悪かつたな。」

「ナオ。… ギター、諦めるなよ。」

「当たり前だ。良二、来てくれてありがとうな。」

「都合悪いことあつたら、言えよ？ま、後で手伝つたぶんのアルバ

イト代、請求してやるからさ。」

「お前には、死んでも頼まないつて。」

「そんなこと言つなよー。知つてんだろう？バンドやるの、金かかるんだよ。」

「お前、ボーカルだろ？！ギターのオレに、たかるなつ！」

「ハハハ。じゃ、悪い、バイトあるからさ。早く元気になれよ。」

「ああ。来てくれて、ありがとな。」

「仲良しなんだ？」

「大親友。口悪いけど、イイヤツなんだ。」

肩越しにサクラの声が聞こえてきた。突然現れるのには、もう慣れていっている。

「幼馴染みでさ、昔は家の近くに住んでたんだ。引っ越して、隣町に行つたんだけど、よくつるんで遊んでる。」

「いいよね、友達つて。私もバンドの仲間とは、朝まで曲創つたり練習したりして騒いでるもん。」

「サクラのバンド仲間、逢つてみたいよ。」

「うん、思い出せたら必ず紹介するね。」

今日も、変わらない笑顔を見せるサクラ。オレの身体も良くなつてきているし、サクラの方も、オレと話すつむじに色々思い出したようだ。このまま上手くいけば、オレが退院するととも、サクラも自分の身体に戻れるかも知れない。

『その時は、サクラに告白しよう。』

オレは、もう心に決めていた。毎日向けられる、あの笑顔をなくしたくない。

「そろそろ、一度週末あたり家に帰つてみるかい？」

「え？」

「家に帰つてどのくらい生活出来るか、みたほつが良いこと思つよ。

「… そうですね。家族にも、そう言つてみます。」

「… という訳でさ、週末帰つてみようと思つんだ。」

今日の診察で、外泊を勧められたことをサクラに話す。

「ふうーん。なんか、淋しいな。」

「そつか。サクラ、話す相手が居なくなつちやうもんな。」

「うん。ツマンナイ。」

デイルームから外の景色に目をやるオレの隣、チョコンと座るサクラは、長い髪をかきあげると口を尖らせ横を向いた。

「お兄ちゃん！」

「ナオ、こんな所にいたのね。」

デイルームが突然騒がしくなつたと思ったらウルサイ母親と妹だ。

「こんなところで一人黄昏ちやつて、お兄ちゃん相変わらずだよね

一。

言いながら、紗江はオレの隣、サクラの座っているその場所にドカラリと腰を下ろす。

「あー。」

妹と“重なつた”サクラは、不満そうな声をあげる。怒つたような困つたような複雑な表情でソファーから立ちあがると、オレの方を見て肩をすくめた。

「紗江、そこ座るな！」

「なによ、お兄ちゃん。誰も居ないのに。」

「居ないけど！オレにとつては、居るんだ。どけよ。」

「また、ワケわからんことを。頭、大丈夫？」

「お前よりマシ。いいから、そこ空けろ。」

「ハイハイ、うるさいんだから。」

空いたスペースに、嬉しそうにサクラが座る。顔の横に出されたピースサイン。思わず、顔がほころんだ。

「なにか、いい知らせ？ニヤニヤしちゃって。」

「え？いや、別に…… そうだ、週末、先生が一度家に帰つてみろつて。」

「やつたじやん！帰つてきなよ、土曜日花火大会だしさ。家から見えるよ。」

そうか、近くの川沿いで、毎年花火大会をやつてたな。いつも、こんな季節だったか。オレの部屋からは、花火がハツキリ見えるから毎年花火大会の日は、決まって部屋は家族に占拠される。その日の夕食は、普段使わないちゃぶ台をひつぱり出して、オレの部屋で食べるのが恒例だ。いつからそうなつたのか、サッパリ憶えていない。ただ言えることは、オレが嫌だとつたところで、誰もそれを止め

ようとしないということだけだ。

「サクラ、聞いていい？」

「なに？」

夕食の時間が終わってしばらくなると、騒がしい一人は帰つていつた。病室に一人きりになつたオレは、ずっと氣になつていたことを聞いてみることにした。

「サクラ、記憶が戻つてきたって言つてただろ？ それで、さ……。

「なあに？」

「彼氏、とか…いたりする？」

「ハア？」

「だから、付き合つてる相手を思い出したとか。」

「付き合つてる、ねえ…マサキ・カグラ・てつちん・レイ。」

「い、五人？！」

「付き合つてたバンドのメンバー。なに焦つてんの？」

小悪魔な笑みを浮かべるサクラ。オレの気持ちを知つてゐのかもしない。年上の余裕つてやつなのか？ ふと、そう考えてから急いで否定した。オレだって、そんなお子様じゃない！

「なるほどね、性格悪くて男いなかつたんだ。」

「なつ！ そんなことないもん。ナオと一緒にしないでよ。」

「オレは、性格悪くないし彼女居ないなんてサクラに言つた覚えな
いけど？」

「じゃ、ここの？」

「……いない。」

「人のこと言えないじゃん。」

「悪かつたなつ！」

「私が、なつてあげよっか?」

「え? !」

予想外の言葉に、オレは次に返す言葉が見付からずただ戸惑つばかりで…その表情を見て、サクラは、また笑つていた。そして、さつきの言葉が冗談だとも本気だとも言わないまま、ひとしきり笑つたあと姿を消した。

…そして、週末が来た。

「母さん、こんな早くに迎えに来なくたって良かつたのに。」「良いじやない、せつかく外泊許可出たんだから。荷物はこれでいいかしら?」

今日は、まだサクラの姿が無い。オレは、彼女に對してちょっとした計画を立てていた。そのためには、母親に連行される前に出てきてもらわないと。

「サクラ、出てこないつもりかな…。」

「何か言つた?」

「何も。」

「あつそ、ほら行きましょ。」

「もう? !」

「いいじやない。今日は父さんも休みだし、皆待つてゐるわよ。」

せかされて病室を後にする。周りを見回しても…やつぱり居ない。今日は、現れないつもりなのだろうか?ナースステーションに外泊届けを出し、エレベーターに乗り込む。5・4・3・2・1、扉が開いた。

「車、入り口までまわすから待つて。目の前の駐車場、空いてな

くて。」

「ああ。」

そう言って母親は走って行つた。入り口にポツンと立つたオレ。そういえば、パジャマ以外の服装も久し振りか。久し振りにはいたジーンズが、重たく感じる。

「いつてらつしゃい。」

「！ サクラ、やつと出てきた。」

「あーあ、つまんないなあ。でも、怪我治つて良かつたね。もう少しで、退院かな？」

「かな？…あのさ、オレ考えたんだ。サクラは、俺にしか見えない話せないんだろ？ だつたら…。」

「 プッパー！」

「あ、迎えきたよ。」

「今日、花火大会なんだ。サクラと見たい。」

「え？」

神様、お願ひだ。どうか、この手を…！

オレは、手を伸ばしサクラの手を掴んだ。

「ええ？！」

「捕まえた！！ 一緒に行こう、サクラ。」

驚く彼女の手をシッカリと握つて、オレは車の後部座席に乗り込む。サクラが隣に座つたのを見ながら、オレはドアを閉めた。左手は、しっかりと繋いだま。今この手を離して、消えられたら嫌だ。

「ちょ、ちょっと？！」

サクラの方が、オレより驚いているようだ。今まで見たことの無い、

とまじまつた表情をしている。

今までサクラと話していて、彼女が病院から外に出でていないとこ
とをなんとなく感じていた。

「部屋から見える花火、綺麗なんだ。見せたくてさ、どうせやるこ
とないって言ってたし。」

「…ありがとう。」

「ああ。」

病院が、遠ざかる。繋いだサクラの手は、冷たかつたけれど柔らか
かつた…。

「ただいま。」

「おっ帰りい、お兄ちゃん！」

久しぶりの我が家に、なんだか懐かしさすら感じる。住宅地の中の
ありふれた一軒家。周りの家と比べても、オシャレでもなく広くも
ない。いたつて普通の家なのだが、この家に帰れたことが無性に嬉
しい。入院生活が、続いていたせいだろうか。

「へへ、ここがナオの家なんだ。」

「ああ。」

「ウフフ、お邪魔しまーす。」

早速、自分の部屋へと向かう。リビングには父の姿もあつたが、ど
うやらソファーでうたた寝しているようだ。

「あの人、ナオのお父さん？」

「や。」

「初めて見たなあ。よく似てるよね。」

「そうかあ？」

「寝顔なんか、おんなじだよ。」

「…サクラ、いつオレの寝顔なんて見てたんだよ?」

「ん? そんなのいつだって見れたよ。」

「悪戯とかしてないだろ?」

「さあ?」

一階の奥が、オレの部屋だ。隣には、妹の部屋もある。そういうえば、部屋、散らかつてなかつたか?

「とりあえず、ここがオレの部屋。入つて。」

「うん。」

中は、オレが不在の間に母さんが片付けたよつで、すっきりとした。まあ、いつもは雑然としているのだが。意外に綺麗だね。いつもじゃないでしょ? 「つるさい。」

「あー。」

部屋の隅に置かれギターを見付けたサクラが、嬉しそうに飛び付く。

「うーん、この感じ。ね、なんか弾いてみてよ。」

「そんな、突然言われたつて。」

「えー、だつて私こんなで弾けないし。ギターの音が聴きたいもん。」

「うーん、分かつたよ。じゃ、準備するし待つて。」

このギターは、一番最初に買ったギターで、あまり使っていなかつた安物だ。お金を貯めてから買ったお気に入りのギターは、事故に合つたとき壊れてしまつたと妹から聞かされた。

「緊張するな。」

「ライブやるつて言つてた人が、観客一人でビビらないの。最初のお客様なんだから、よろしくお願ひします。」

「ん。」

久しぶりの感触だった。硬く感じる弦を押さえ、オレは事故前によく弾いていたバラードを弾くことにした。

アンプから流れる切ない旋律。練習不足で指が動きにくかったけれど、サクラを想つて曲を奏でる。

「… これで、いいかな?」

「うん、ありがとう。大満足だよ。」

彼女の笑顔を見て、ほつとした。失望させずにするんでもよかつた。サクラが喜んでくれた顔を見て、オレは失くしかけていた自信を少し取り戻した。退院できたら毎日練習して、いつかサクラと一緒に弾きたい。

バタバタバタバタ…！

「お兄ちゃん、お兄ちゃん、入るよ…」

「なんだよ、紗江！」

「夜の準備！さつそく弾いてるの？好きだねー、お兄ちゃん。と、どいでどいでちやぶ台重いんだから。」

「まだ、昼前だろ？」

「今の中に持つて行け、つて母さんが。お兄ちゃんが帰つてきて張り切つてるんだよ。よかつたよねー、」今まで治つて。」

「ああ。」

それから夕方までは、あつといつ間に過ぎていった。相変わらず、笑えないオヤジギャグばかりとばす父に上機嫌の母、騒がしい妹。

「ナオの家族、楽しいね。」

「騒がしくってさ。」

「良いことだよ。」

「サクラの家族って、どんな感じ?」

「んー…。」

「覚えてない?」

「違う、堅苦しい感じかな?ナオみたいな家族なら良かつたのに。」「そうか?振り回されて、疲れるだけだと思つけどなあ。」

「ナオー!そろそろ料理を運んでちょうだい!ーー!」

「ハイハイ。…ほらね。」

ドーンー・ドーンー・!

空一面に、鮮やかな華が咲き、夜の闇が明るく照らされた。

「綺麗だね。」

スッと、と隣に並んだサクラが呟いた。

ドキン。

周りに鼓動が聽こえるかと思つまび、胸が鳴つた。

今まで、こんな感情を持つことはない。

「…ちゃん、お兄ちゃん!」

「え?ー!」

「え?じゃないよ。もひつー!あのせ、もしバンド組む話がながれて、ギター辞めるとか言い出したら渡しちらーいなあとか思つて渡してなかつたんだけさ。」

「なんだよ、紗江?」

「はい、警察の人から渡されてたんだ。」

そう言つて手渡されたのは、手書きの樂譜スコアだつた

「え？ これ…。」

「事故の時、散らばつちやつたのを集めてくれたんだつて。」

それは、何度も書き直したらしい跡があるスコア。歌詞のメロディー、ギターのコードは複雑で、自分には、弾くことなどとても無理だ。

「これ、オレのじやな…。」

世界が、止まつた。

夜空に打ち上げられた花火の軌跡は、花開くことなく中空に止まり。総ての音も失われた。

凍てついた、静寂の世界。

「やつと、見つけた。」

「サク…ラ？」

「ナオが特別だつた理由、今わかつたよ。私の“命”は、ここにあつたんだね。」

手書きのスコアを懐かしそうに、愛しそうに見つめる彼女。

「“あの日”、私の時間は止まつてしまつた。ナオは、思い出しないか。フフ、私もあのバスに乗つてたんだよ。自分と同じようにギターを背負つてる男の子の隣に、ね。」

オレは、ただ呆然とサクラを見つめていた。いや、言葉が出なかつた。

それは、認めたくないからだ。

「バカだよね、私も。こんなに大切にしてたモノを忘れちゃって… 血で染まつた紅い服を着てるのに、自分が死んでる事も忘れちゃって…。」

「嫌だ…！」

オレは、叫んだ。

「死んでるとか言つなよー信じねーよ、そんなの！ オレは、オレはつー！」

「ナオ…。」

「サクラが好きだ！一緒にいたい、このままずっと…なんで…なんでだよっ？！ オレは、事故のことなんて、何も覚えてないつ…。」

「…。」

「信じなーつ！」

叫びながら、目を閉じた。

すると、唇に柔らかな感触を感じた。驚いて目を開けると、オレに口づけるサクラの顔があつた。

「サクラ…！」

強く抱き締めた身体が冷たい。細い身体を引き寄せ、もう一度キスをした。背中に回された手が、優しくオレを抱き止める。

止まった時間の中で、何かを確かめるように唇を合わせ、言葉では伝えきれない想いを託すように… 溢れる吐息、そしてゆっくりと唇が離れた時、サクラが言った。

「私も、ナオが大好きよ。」

ドーン！

夜空に 満開の華か咲く
オレの頬を一筋の涙が伝い…溢れ落ちた。
「ボ

紅い海は夢色に染まる

今、オレはバスに乗っている。そう、事故にあつたあの路線を走るバスだ。あの時と同じようにギターを持って。違うといえば、今日は、片手で持つには大きすぎるほどの花束を持っていることだ。

季節は、もう夏から秋へと変わっていた。

近くの停留所から、オレは“彼女”的元へ向かった。

なんた
オレ以外でもサケラに逢いたし奴
でいるんだな

こに来る途中、やたら気分が悪くなる場所があつたが、やはりそこが事故現場だつたらしい。母親に聞いた場所には、自分以外にも誰かが花を供えていた。花の供えは、死んだ人の靈廟だ。

純白の薔薇を捧げ、オレは下に広がる海へ降りた。岩場の多い場所だが、広くはないものの泳げる場所もある。こんな季節に泳ごうなんて考える人間は、さすがにいないようで、静かな海辺に自分以外の人影は無い。

ふと、
“唯一思い出した”サクラとの想い出が脳裏をよぎる。

『隣、いいかな?』

『あ、はい。』

バスに乗り込んできた女性は、オレの座っていた一番後ろの席に座る。純白の衣装にギターを背負った彼女は、美人でとても目立っていた。

『ね、キミもギターやってるんだ?』

『はい、そうです。』

『クスクス、そんな緊張した話しかしなくたつていいよ。』

「…あの時は、プロのミュージシャンだと思ったんだよ。ま、実際サクラは“本物”だよな、あんな曲作れるんだから。」

花火を見た夜に、オレはサクラと約束していた。

あの夜。

「ナオ、私行かなきや…。」

「嫌だ!離さないっ!!…今離したら、サクラ死んじゃうだろ?」

「…死なないよ。」

サクラが、優しい笑顔でオレを見た。そして、じつとオレの瞳を見つめながら、諭すように言葉を続ける。

「さつき、言つたよね?このスコアは私の“命”だつて。だから、これをナオが持つていて。」

「…。」

「ナオ、約束しない?」

「…約束?」

「うん。ナオは、“私”が消えてしまわないように、このスコアの曲を弾けるようになること。ちゃんと弾けるようになつたら、私が“眠つてる”海においてよ。いいもの、プレゼントしてあげるから。」

「…サクラ、どうしても…。」

「時は、戻らない。…私は、奇跡の時間を貰つてたんだもん。幸せだよ。彼氏も出来たしね。」

「……約束、忘れるなよ？絶対、サクラよりギター上手くなつて逢いにいつてやるからなつ。」

「フフ、楽しみに待つてるからね。」

「ホント、性格悪いよな？スッゲー難しかつたんだぞ！毎日何時間も練習したぞ、早く逢いたかったのに、もう秋だよ。」

オレは、ギターを取りだし、この日の為に練習してきたサクラの曲を弾いた。

『サクラ、聴こえてるか？』

「… なあ、俺たち以外で花が供えてあるなんて、初めてだよな？」

「ああ。桜の奴、家出して家族とも仲悪かつたし、音楽以外興味ない奴だつたし。」

「しかし、メンバー全員が同じ夜に同じ夢みるなんて…あいつ、ヤツパ成仏してないんじやねーの？」

「桜ならあり得るな、黙つて寝てられる性格の女じやなかつたし。だいたい、預けたい大事なモノつてなんだよ？」

暮れかけた海を見下ろす道路上に、四つの人影があつた。数ヶ月前、この場所で事故に遭い、命を落とした“仲間”を弔つたために集まつた四人。

「なあ、下に誰かいるじゃん。」

赤い髪の青年が指差す方に、自分達以外の人がいる。

「ん? ゾーサン（アンプ内蔵のエレキギター）弾いてるんじゃない
か?」

「お、ホントだ。高校生かな?」

金髪ロン毛の一人も、そちらを見る。

「……。」

スッヒ、長い黒髪の青年は、何も言わず下の海へ降りていく。

「あ、待てよレイ!」

慌てて三人が、彼を追いかける。

海が、空が、紅く染まっていく。沈みゆく日の光が、海面を反射し
黄金の煌めきとなつて世界に散らばっていた。

『ナオ、聴こえてるよ。』

聞き慣れた声が、聞こえた。サクラに、この曲が届いている。オレ
は、海を見た。光が散らばる紅い世界に、純白の服を着て微笑むキ
ミが見えた。光に包まれたその姿は、最高の笑顔でこちらに向かっ
て頷くと、煌めきとなつて消えた。

「……間違いない。桜が創つてた曲だ!」

「え、何?」

「アイツが弾いてる曲だよ! オレが詩を書いて、毎日何時間も合わ
せてたから間違いない。」

「

黒髪の青年が驚いて、彼を見る。そこに、赤い髪の青年が肩を組んできた。

「はあーん、桜の言つてた預けたいものつてのが、判つたぜ？アイツつて、年下が趣味だったんだ。」

「… そうか、そうだな。ギタリスト不在だからな。」

「… サクラ、オレ、忘れないよ。一緒に過ごした時間と、サクラを好きになつた事。」

「ナオ、私から、最高の夢がみれるプレゼントをあげる。振り返つて…。」

fin

（後書き）

これまた若い時の作品で、今の私は読むのが恥ずかしかつたり（苦笑）

この作品には影響を受けた曲がありまして……とあるインディーズのバンドをやっていた方の曲が好きすぎて作ったものです。残念なことに、某所が楽曲のクリエイト部門を辞めてしまったため、もう公で聞くことはないのですが。一切なく報われない想い、そんな曲を聞きながら作った作品ですので、完全なハッピーエンドではありませんが不幸せでもない、不思議な話になつてます。

真夏の夜の夢、儂ぞ。

そういうものを楽しんでもらえれば幸いです。

ここまで読んでいただいた皆様、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1228y/>

紅い海は夢色に染まる

2011年11月1日15時19分発行